

「普通」という見えない壁

奈良市立富雄第三中学校 2年 三宅 奈乃花

「三宅さん、また忘れたの？」そう言われた瞬間、教室の空気が重くなった。宿題を家に置いてきてしまった。先生はため息をつき、周りから小さな笑い声が聞こえた。もちろん忘れたかったわけではない。前の日には何度も確認した。絶対に持って行こうと思っていた。それなのに忘れた。そんなことが一度や二度ではなかった。私は人より苦手なことが多い。話を聞いていたはずなのに内容が抜けている。頑張ろうと思うほど空回りしてしまう。周りからみたら「うっかり」かもしれない。でも私にとってはその「うっかり」がほぼ毎日起きる。教室にはいつも「普通」があった。忘れものはしないこと。時間を守ること。授業に集中すること。多くの人にとって当たり前のこと。でも私には難しいこと。「普通」が怖い。そのことを聞くたびに自分に届かない「場所」がある気がするからだ。気付けば私は人と比べることが癖になっていた。あの子はできる。みんなは「普通」。それなのに私だけ違う。そんなことばかり考えていた。ある時、私は思った。もし魚に木登りをさせたらどうなるのだろう。きっと魚は何度挑戦しても登れない。そして周りから「努力不足だ」と言われるかもしれない。本当にそうだろうか？魚が悪いのではない。魚には魚の生き方がある。得意な場所がある。それなのに私たちは、一つのものさしだけで人を測ろうとしてしまう。学校でも社会でも。知らないうちに「普通」を作り、その中に入れない人を苦しめてしまう。私もその苦しさを知っている一人だ。だからこそ伝えたい。人は見えている部分だけでは分からない。笑っている人が悩みを抱えていることもある。元気そうな人が傷ついていることもある。できないことの裏側で、誰よりも努力していることもある。私達は自分が思っている以上に他人のことを知らない。それなのに勝手に決めつけてしまう。「怠けている」「やる気がない」「普通じゃない」そんな言葉は、人の心に深く残る。見えない傷になる。忘れものをすることもある。周りと比べて落ち込む日だってある。正直に言えば自分を好きになれない日だってある。見上げれば高い壁があってその向こう側は見えない。でも昔の私と今の私には一つだけ違うことがある。それは「普通になれない自分」を消そうとしなくなったことだ。出来ないことは今もある。多分これからもある。それでも私は「私」のまま生きていくしかない。そして、そう決めたときに気付いた。苦しかったのは、出来ないそのものではなかった。誰かと違うことを恐れていたからだ。世の中には、私と同じように見えない苦しさを抱えている人がたくさんいる。もしそんな人がいたら、私は伝えたい。無理に「普通」にならなくてもいい、と。もちろん、それで悩みが消えるわけではない。また落ち込むかもしれない。傷つく言葉を聞く日もあるだろう。毎日、毎日、悩みながらすごしてしまうかもしれない。きっと、私は、今も「普通」の外側にいる。それでも少しだけ思うのだ。もしかすると、本当に変わるべきなのは普通になれない人ではなく、「普通」という言葉で誰かを閉じ込めてしまう社会の方なのかもしれない、と。その答えはまだ分からない。これからさきも、たくさんの壁にぶつかっていく。壁は消えていない。それでも、私は「私」として生きていたい。

そう思うことで、壁の向こう側が少し見える気がする。その壁の向こう側で、誰も自分を「普通」で測らなくてもいい世の中に少しでも近づけることを願っている。